

盲いたシンキンチョウの絶唱

く チュフサンマの悲歌、そして哀歌、そして挽歌く

作 長屋 のり子



私は樺太アイヌの長老(エカシ)バフンケの姪シンキンチョウ。

一九一八年五月 パリ 雨の朝セーナ川のミラボー橋の下で

死んだ夫ピオトル・ピウスツキを恋うて 慕うて

恋うて 唄んで歌う 私の白鳥の歌、

あなた聴こえますか？ ピオトル、あなた聴こえていますか？

故国ポーランドの過酷な政治の歴史から押し出されて

あなたは流刑人としてこの地にやってきました。

この樺太に。私たちの島、私たちの恩寵の

長く先祖の守り続けた厳しい 愛しい この島に。

あなたは此処コルサコフにやってきました。

あなたは絶望し荒廃した他の流刑人の誰とも違った。

神から授かった生命を 生き切ろうという意思を

凜然と額に結んで輝きを放ち続けていた。亡国の不安の

その黒々とした暴力の記憶を背負いながら

あなたは違った。あなたは他の誰とも誰とも違った。

世界の不条理、歴史の苛酷さのなかで、

あなたの精神の発条(バネ)は頑丈だった。あなたはそのため

この島にやってきましたかのように 私たち先住民族に

臆せず親愛をこめて近づいた。あなたの心の底から

こみあげてくるような人懐っこい微笑みを 私は忘れない。

あなたは比類ない 慈しみをたたえて 私達の

村にやってきました。あなたは熱い情熱と深い畏敬を

こめて 私達のエカシに云った。

「私はあなた達を深く知りたい。そして深く学びたい」と。

ロシア学士院の依頼で、私達 民族のことを

学究的に知りたい、調べたいのだと申し入れた。

学究的なことは 私には 皆目分らないし、いらぬ。

私達、私達アイヌは 天の恵みを得て、ここを

原郷と信じて美しい原始の慣習を ここで生きつづけてきた。

神と共にある暮し レラ(風) アンチュプ(月)と共にある暮し

人間の営みへの深い肯定と悲哀との調和を豊かに生きて、

私達がどこからきたものであるか、そのルーツなど、

考えもしないことだった。私達には不必要だった。

樺太こそが私達の生命、私達の精神の美しい原郷。

私にはただ 日々エカシのもとに通いつづける

あなたの 不屈の精神が 眩しかった。

今も 私に 真実大事なのは、あなたにはじめて抱かれた日の

あの美しい湖のほとりの五月の 夕暮れのことだけだ。

五月だというのに小雪が 淡く舞っていた

あの丘のことが たまらなくなつた。

分厚い 雲の切れ目が遠く 薄赤く染まっていた。

広い湖の水は 澄み渡り、対岸の岩山は

雪に覆われて氷山のようにだった。

水際には 四十五億年前、地球が固まった当時

そのままのように 黒っぽい岩の断層面が 荒々しく

むきだしていた。 太古そのままに荒涼

と張りつめる 静寂の中に 二人立ちつくして、

そして あなたはあの日 私を不意に抱き寄せた。

あなたは激しく 優しく 私を抱いた。

あの夕暮れ、あなたは湖の波だった。

波のように 私は 抱かれた。私の魂の肌はまだ

しんしんと染み透ってくる 不思議な波。

それは靈気とさえ言つて いいもの。

この寒冷の島で 孜々営々、生命を繋ぎ

紡ぎつづけた 私たち先住民族への

畏敬を込めて 湖のほとりで 五月の夕暮れ

私を聖なるものを 抱くように、愛おしく狂おしく

そして大事に 本当に大事に抱いた。私の天に向かつて放つ声を

世界一 美しい音楽を湛える声と あなたは

囁いた。あの日、あなたがポーランド人の

強い魂の力の比類ない証として、私の

体内に注いだ熱いもの あれは一体

何だったのでしょうか。あの熱源は

年若い 盲いた今も 私の身体の奥でつんざく悲鳴のように疼きます。

あの湖のほとりの あの夕暮れを思うと

私の心は今日も、(あなたを永遠に

失つたと知らされた今日も……) 静かに

垂直に立つのです。あの夕暮れは

生命以前の 原始地球の風景の中にも

あつたもの、いいえ、宇宙全体でひそかに

波打ち続けていたもの、と今は思えます。

静かな激しい慈悲として 私の魂に

しみ入り、注がれたあなたの血は、やがて

一九〇三年、長男 愛しい助造の誕生に結びました。

一九〇五年まで続いた 私達のあまやかな琴瑟の営み。蜜月の日々。

サハリン東海岸、相浜の海辺、相川と呼ばれた

小川のほとり。アイハマ アイカワ、

そこはその地名さえ愛アイに縁どられた場所。

今も見えない眼から 涙がにじむほどに

懐かしい 懐かしい感覚が 身の内を走ります。

日露戦争のあと、あなたが、独立戦争の絶好の機と

勇躍 祖国を奪い返すために

鳥が翔つように ポーランドに帰国して、

私はその秋、一人寂しく あなたの面影を深く映す

娘キヨを生んだのです。

それからいくつもの春が巡って、駒鳥は

群れなして、私の頭上を 飛び交い囀ったけれど

あなたは帰って来なかつた。

祖国を奪い返してから、祖国の独立を

果たしてから「必ず迎えに来る」という

ピオトル、あなたの真摯な言葉を信じて私は待った。

あなたの残した識字学校の教師を勤めながら、私は待つて待つて

待ちつづけた。ひたすら ひたすら待ちつづけた。

サハリン、アイハマ アイカワのほとりで。

湖がさざ波たてるたび 小川がサラサラ鳴るたび 春の小鳥達が

鳴き交わすたび、私の心はムックリの音のように

トンコリの音のように さざめいた。

一九一八年、一二三年ぶりに ポーランドが

独立を果たしたと、樺太の白樺を吹き抜ける風が 私に伝えたけれど

それで私の血は激しく躍ったけれど あなたは帰って来なかつた。

ああ、その年に あなたが、パリで、ミラボー橋の下で

不審死したと 知らされたのは

一九三四年、今日の正午のことです。

あなたの弟、ポーランド革命の指揮者ユゼフ元帥の使者から

それは峻厳に 丁重にもたらされました。

これまで屹立しつづけた対岸の氷山が一瞬にして砕けおちました。

私は泣いて泣いて溺れ死にでもするように泣いて……。

与謝野晶子の詩のように「旅順の

城は滅ぶとも 滅びずとも 何ごとぞ……」です。

女に革命はいらないのです。

大義など、いらぬのです。

夕暮れの 湖の 静かな波音だけが、

今も私の耳底で響きます。

交わした睦ごと、あなたの振動、私の振動。

私は二十九年あなたに焦がれて 焦がれて 泣きつづけて

今はもう盲(メシイ)となりました。

盲いた私には、今、宇宙から降るこの世のものならぬ、

澄んだ音が、本当に 聞こえ続けるのです。

記憶の破裂音が胸劈(つんざ)いて 私はやっと気づくのです。

十六年前、あなたがパリで不慮の死を遂げた日、

わたしは夥しい白鳥が まるで天地の運行のように

悠久に ひたすらに サハリンの

夜空を流れるのを 確かに見ていたのです。

一羽の鳳(オオトリ)の鋭く 切なく 親しく、懐かしく

鳴くのを聞いているのです。幻聴ではなく

あれは、まさしくまさしくあなたでした。ピオトル、あなたでした。

命賭した 革命を終えてパリから

あなたの魂は まっすぐに 一目散に

私と、あなたの俊秀の潔い血を継ぐ あなたの子供達

愛しい愛しい助造とキヨの 待つ 樺太に

帰ってきてくれたのです、アイハマに、アイカワに。愛の巣に。

あなた聴こえますか？

あなた聴こえていますか？

もうすぐ もうすぐ、シンキンチョウは、ピオトル

あなたのもとに赴きます。

私も亦、白い鳳となつてピオトル あなたの今過(ご)す場所

目指して 飛び翔ちます。

あなたが愛でて やまなかつた アイヌの

美しい旋律で、トンコリのように、ムックリのように

優美にクオオー クオオと 鳴きながら。空に舞います。

五月の天国(ライソ)の小鳥たちの囀る岸辺で

もう一度 あなたに抱かれるために。

あなた聴こえますか？

樺太アイヌ シンキンチョウの音が、

あなた聴こえていますか？

あなた、あなた、聴こえていますね。

*夫の死が告げられた、その三年後の一九三七年、ポーランドの英雄、ブロニスワフ・ピオトル・ピウスツキにその一生を、全生涯を捧げて、樺太アイヌシンキンチョウ没。

(感想) 花崎皋平、[ユサンマとトシ](#)、小樽詩話会 606、2017.8.5



(上) ブロニスワフ・ピウスツキの肖像画(油彩)、アドマス・ヴァルナス画、1912(ユゼフ・ピウスツキ博物館蔵)(中)妻チュフサンマ(下)長男木村助造(A.Janta-Polczyński 撮影、樺太・白濱/白浦, 1934.1, The collected works of Bronisław Piłsudski. Vol.3. Materials for the study of the Ainu language and folklore 2. Ed. by A.F.Majewicz. 1998. Plate CLXXXI. p.203)